

Oracle® Fail Safe

リリース・ノート

リリース 3.3.3 for Microsoft Windows (64-bit)

部品番号 : B14397-01

原典情報 : B14155-01 Oracle Fail Safe Release Notes, Release 3.3.3 for Microsoft Windows (64-bit)

2004 年 8 月

このドキュメントでは、Oracle Fail Safe リリース 3.3.3 for Microsoft Windows (64-bit) について説明します。ソフトウェア互換性、ハードウェア互換性、インストールと削除、および Oracle データベースの可用性を高める構成について説明します。

1 このドキュメントの構成

このリリース・ノートは次の項目で構成されています。

- [このリリースの概要](#)
- [ソフトウェアの互換性](#)
- [ハードウェアの互換性](#)
- [インストール](#)
- [新機能 : fssvr のコマンド修飾子 /GETSECURITY](#)
- [Oracle Services for MSCS](#)
- [Oracle データベース](#)
- [ディスク・リソース](#)
- [仮想アドレス](#)
- [Oracle Enterprise Manager との統合](#)
- [このリリースで更新されるドキュメント](#)
- [追加情報](#)
- [ドキュメントのエラーおよび脱落](#)

2 このリリースの概要

このリリースの Oracle Fail Safe はサーバーのみのリリースで、Oracle Fail Safe Manager は含まれません。

ORACLE®

Copyright © 2004, Oracle. All rights reserved.

Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。Oracle® Fail Safe は、Oracle Corporation の商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

3 ソフトウェアの互換性

このリリースの Oracle Fail Safe は、次の表に示すソフトウェアと互換性があります。

ソフトウェア	リリースまたはバージョン
Microsoft Cluster Server (MSCS)	バージョン 5.0 以上
Oracle Database (Standard Edition および Enterprise Edition)	Oracle9i リリース 2 (9.2) (64 ビット) Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) (64 ビット)
Oracle Intelligent Agent	リリース 9.2.0 (64 ビット)
Oracle Enterprise Manager	リリース 9.2.0
Oracle Fail Safe Manager	リリース 3.3.1 リリース 3.3.2

この 64 ビット・バージョンの Oracle Fail Safe は、32 ビット・バージョンの Oracle Fail Safe Manager リリース 3.3.1 またはリリース 3.3.2 とともに使用できます。Oracle Fail Safe Manager は、Oracle Database キットに付属の Oracle Fail Safe の CD-ROM (32 ビット) に含まれており、次のいずれかの 32 ビット Windows オペレーティング・システムにインストールする必要があります。

- Microsoft Windows NT バージョン 4.0 (Service Pack 6a)
- Microsoft Windows 2000
- Microsoft Windows Server 2003
- Microsoft Windows XP

4 ハードウェアの互換性

ハードウェア・ベンダーに連絡を取り、Oracle Fail Safe を使用するハードウェアで、Microsoft Cluster Server ソフトウェアの使用が保証されていることを確認してください。

5 インストール

この項では、Oracle Fail Safe のインストールについて説明します。

インストールと削除の詳細は、『Oracle Fail Safe インストール・ガイド』を参照してください。

5.1 MSCS クラスタ アドミニストレータによるフェイルセーフ・リソース・タイプの問題の表示

Oracle Fail Safe のインストールの完了後、MSCS クラスタ アドミニストレータでフェイルセーフ・リソース・タイプ (データベースなど) の問題が表示される場合があります。MSCS クラスタ アドミニストレータでは、そのリソース・タイプ名の上にオースラッシュ (φ) 記号を表示して、問題が発生したことを示します。

この問題が発生した場合は、次のようにします。

1. Oracle Fail Safe のインストール後にクラスタ・ノードを再起動していなかった場合は、再起動します。
2. PATH 環境変数に、Oracle Services for MSCS パスが含まれていることを確認します。(コマンド・プロンプト・ウィンドウで、PATH と入力してください。Oracle

Services for MSCS パス (%ORACLE_HOME%\fs\%fssvr%\bin) が含まれているはずで
す。含まれていない場合は、これを追加し、Oracle Services for MSCS パスがな
いノードを再起動します。)

3. Oracle Fail Safe リソース DLL の FsResOds.dll が、%ORACLE_HOME%\fs\%fssvr%\bin にインストールされていることを確認します。リソース DLL がいない場合は、Oracle Fail Safe を再インストールします。
4. Oracle Fail Safe Manager を使用してクラスタを検証（「トラブルシューティング」メニューで「クラスタの検証」を選択）して、その後、各クラスタ・ノードを1つずつ再起動します。「クラスタの検証」コマンドは自動的に Oracle リソース DLL の登録を検証します。すべてのクラスタ・ノードを再起動する必要がない場合もあります。1つのノードを再起動した後、MSCS クラスタアドミニストレータでリソース・タイプ名からオースラッシュ記号が削除されているか確認します。オースラッシュ記号がなくなっている場合は、すべてのクラスタ・ノードを再起動する必要はありません。

5.2 Oracle Services for MSCS のインストール時の Windows イベントビューアの稼働禁止

Windows イベントビューアを稼働中に Oracle Services for MSCS をインストールすると、インストール・プロシージャから、fsus.dll（日本語システムでは fsja.dll）ファイルをコピーできないというエラーが返され、再試行するか、無視するか、あるいは取り消すかをたずねられます。Windows イベントビューアを停止し、Oracle Fail Safe のインストール・エラー・ウィンドウで「再試行」をクリックすると、インストールを続行できます。

6 新機能 : fssvr のコマンド修飾子 /GETSECURITY

このリリースでは、fssvr の新しいコマンド修飾子として /GETSECURITY が使用されます。/GETSECURITY 修飾子を使用すると、コマンドが実行されるシステムのセキュリティ情報が表示されます。オラクル社では、FS-1075 n エラー (n は 0 ~ 7 の値) を診断するときに、fssvr コマンドにこの修飾子を指定して（各クラスタ・ノードで）実行することをお勧めします。

コマンドおよび対応する出力は次のようになります。

```
fssvr /getsecurity
```

```
Looking up user account information for OracleMSCSServices.  
The user account must be a domain user account with local Administrator  
privileges. The user account must also have the 'Log on as batch job'  
privilege.
```

```
User account specified for OracleMSCSServices is NEDCDOMAIN\cluadmin  
User account specified has local Administrator privileges  
User account has the 'Log on as batch job' privilege
```

```
Looking up user account information for Cluster Service. The user account  
must be a domain user account with local Administrator privileges. The user  
account must also have the 'Log on as batch job' privilege.
```

```
User account specified for Cluster Service is NEDCDOMAIN\cluadmin  
User account specified has local Administrator privileges  
User account has the 'Log on as batch job' privilege
```

```
Checking to see if DCOM is enabled. DCOM must be enabled.  
DCOM is enabled.
```

7 Oracle Services for MSCS

Oracle Services for MSCS と Microsoft Cluster Server は、異なるアカウントで実行できません。

クラスタが最初に構成され、Microsoft Cluster Server が最初にインストールされた場合、これは Microsoft Windows ユーザー・アカウントのもとにインストールされています。

Oracle Services for MSCS は、(システム・アカウントではなく) 全クラスタ・ノードに管理者権限を持つドメイン・ユーザー・アカウントのもとで Microsoft Windows サービスとして実行されます。Oracle Services for MSCS をインストールする際、必要な権限を持つユーザー・アカウントのユーザー名およびパスワードの組合せを入力するように求められます。このアカウントは、Microsoft Cluster Server がインストールされたアカウントと同じである必要はありません。

Oracle Fail Safe リソースの Is Alive ポーリングは、Oracle Services for MSCS が稼働しているアカウントではなく、Microsoft Cluster Server が稼働している Microsoft Windows アカウントを使用して実行されます。

8 Oracle データベース

この項では、Oracle データベースについて説明します。

8.1 「スタンドアロン・データベースの検証」コマンド実行時のエラー

Microsoft Windows では時として (別プログラムがファイルを更新している場合など)、データベース用の初期化パラメータ・ファイルが別ユーザーによってロックされていると判断され、ファイルが一時的に名前を変更されたり、読み込み / 書き込みアクセスのために開かれたりすることが拒否されます。このために、「スタンドアロン・データベースの検証」コマンドが実行されたときに問題が発生し、不可解なエラー・メッセージが返される原因ともなります。「スタンドアロン・データベースの検証」の実行時に次のメッセージと同様のエラー・メッセージが返された場合は、オペレーティング・システムのエラー・メッセージが表示されずに、データベース用の初期化パラメータ・ファイルの名前を一時的に変更できるかどうかを確認してください。

FS-10890: Oracle Services for MSCS はスタンドアロンの検証操作中に失敗しました。

FS-10818: Oracle Database リソース・プロバイダで、リソース TESTDB1.US.ORACLE.COM の構成処理の準備中に失敗しました。

FS-10160: スタンドアロンの Oracle データベース TESTDB1.US.ORACLE.COM の検証に失敗しました。

FS-10611: ファイル d:\oracle\database\initestdb1.ora を読み込むために開こうとして失敗しました。

0xB: プログラムを不適切な形式でロードしようとして失敗しました

別のアプリケーションがファイルを制御し始めた場合は、ファイルが常駐するディスクを所有するクラスタ・ノードを再起動することで、問題を解決できます (再起動後に必ず、データベース・ファイルを含むすべてのクラスタ・ディスクを、データベースのホストとなるノードに移動しなおしてください)。

8.2 データベースのシャットダウン時に停止して再起動されるデフォルトの Oracle Intelligent Agent

デフォルトの Oracle Intelligent Agent は、デフォルトの Oracle Intelligent Agent が稼働中のノードでフェイルセーフ・データベースを検出してデータベースへの接続を保持しますが、これは適切ではありません。(デフォルトの Oracle Intelligent Agent はノードのホスト・アドレスでリスニングし、仮想アドレスを使用するためフェイルセーフ・データベースを検出するべきではありません。) このため、フェイルセーフ・データベースが Oracle Fail Safe Manager を使用して normal または transactional モードでオフラインに設定されると、Oracle Fail Safe はデータベースをシャットダウンする前にデフォルトの Oracle Intelligent Agent をシャットダウンします。Oracle Fail Safe は、データベースのシャットダウン操作が完了した後、デフォルトの Oracle Intelligent Agent を再起動します。

8.3 サンプル・データベースの作成

Oracle Fail Safe には「サンプル・データベースの作成」コマンドが用意されており、事前構成済みのサンプル・データベースをユーザーの指定したクラスタ・ディスクにインストールします。サンプル・データベースは、テストおよび Oracle Fail Safe オンライン・チュートリアルでの使用を目的とするもので機能もかぎられています。本番には使用しないでください。

サンプル・データベース作成時の対象リリース以外のリリースでのサンプル・データベースの使用には、既知の制限事項があります。

8.4 SYS にする必要があるデータベース・ユーザー名

Oracle Fail Safe のすべての操作を成功させるには、オペレーティング・システム認証が使用される場合を除き、データベース・ユーザー名が SYS であることが必要です。オペレーティング・システム認証が使用される場合、Oracle Fail Safe は SYS アカウントを使用しません。

9 ディスク・リソース

Oracle Fail Safe では、EMC GeoSpan ディスクを使用できます。ただし、リソースのグループへの追加時にリソースで使用されている EMC GeoSpan ディスクがそのグループにまだない場合、Oracle Fail Safe では FS-10203 エラーが返され、処理がロールバックされます。

このエラーが発生した場合は、リソースに必要な EMC GeoSpan ディスクがすでに含まれているグループに、リソースを追加します。

10 仮想アドレス

MSCS ネットワーク名に後続スペースが含まれている場合に、Oracle Fail Safe Manager で仮想アドレスをグループに追加しようとすると、操作は失敗し、次のエラーが返されません。

NT-5045: クラスタ ネットワークが見つかりません。

MSCS クラスタ アドミニストレータを使用して、後続スペースを削除するようにネットワーク名を変更すると、この問題を回避できます。

11 Oracle Enterprise Manager との統合

物理ノードのデフォルトの Intelligent Agent は、グループへのデータベースの追加、グループからのデータベースの削除などの各操作時に自動的に再起動されません。物理ノードにあるデータベースの更新済リストが必要な場合は、デフォルト・エージェントを手動で再起動します。

12 このリリースで更新されるドキュメント

このリリースでは、『Oracle Fail Safe リリース・ノート』のみが更新されています。詳細は、次のマニュアル (32 ビット・バージョンの Oracle Fail Safe リリース 3.3.3 で更新) を参照してください。

- 『Oracle Fail Safe 概要および管理ガイド』
- 『Oracle Fail Safe インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Fail Safe エラー・メッセージ』
- Oracle Fail Safe チュートリアル
- Oracle Fail Safe ヘルプ

キットに付属のドキュメントは、HTML および PDF オンライン形式で提供されます。PDF ファイルを表示するには、Adobe Acrobat Reader 4.0 以上が必要です。最新バージョンは、次の Adobe Web サイトからダウンロードできます。

<http://www.adobe.com/prodindex/acrobat/readstep.html>

13 追加情報

Oracle Fail Safe の詳細は、次の Web サイトを参照してください。

- オラクル社の Oracle Fail Safe 関連 Web サイト
<http://otn.oracle.co.jp/tech/windows/failsafe/index.html>
更新されたソフトウェア互換性情報やホワイト・ペーパーなどが提供されます。
- OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の Oracle Fail Safe 関連 Web サイト
<http://otn.oracle.co.jp/document/products/ofs/index.html>
Oracle Fail Safe 関連ドキュメントへのリンクが提供されます。
- オラクル社カスタマ・サポート・センター
お問合せ先 : <http://www.oracle.co.jp/contact/>
- Oracle University
お問合せ先 : <http://www.oracle.co.jp/contact/>

14 ドキュメントのエラーおよび脱落

この項では、リリース 3.3.3 の Oracle Fail Safe ドキュメント・セットで脱落していた内容を説明します。

14.1 ヘルプでの remote_login_password についての誤った記載

いくつかのヘルプ・トピックでは、remote_login_password データベース初期化パラメータについて記載されています。これは有効なデータベース初期化パラメータではありません。remote_login_passwordfile データベース初期化パラメータとする必要があります。次のヘルプ・トピックに誤った記載があります。

- リソースをグループに追加 : データベース識別情報
- スタンドアロンのシングル・インスタンス・データベースの検証

14.2 『Oracle Fail Safe エラー・メッセージ』での FS-10254 の脱落

『Oracle Fail Safe エラー・メッセージ』には次のエラー・メッセージが記載されていません。

FS-10254 システムに古いリスナーがあるため、Oracle Database 10g TNS リスナーを構成できません。

原因: Oracle Database の以前のリリースの TNS リスナーがシステムに存在するため、Oracle Database 10g TNS リスナーを構成できませんでした。

処置: 次の手順を実行して、既存の TNS リスナーを Oracle Database 10g TNS リスナーにアップグレードします。

1. 既存の TNS リスナーを停止します。
2. 既存の listener.ora ファイルにあるデフォルト・リスナーのエントリを、Oracle Database 10g ホームの listener.ora ファイルに移動します。

14.3 Microsoft Cluster Server (MSCS) の呼称

Microsoft Windows 2000 の登場以前、Microsoft 社は Microsoft Cluster Service を Microsoft Cluster Server と呼んでいました。Oracle Fail Safe は Microsoft Cluster Service および Microsoft Cluster Server の両方で動作するため、Oracle Fail Safe のドキュメントで両製品は Microsoft Cluster Server と呼ばれています。

14.4 Oracle Data Guard での可用性の高いデータベースの使用

Oracle Fail Safe によって単一インスタンスの Oracle データベースの可用性が高くなり、Oracle Data Guard によって障害耐久力がもたらされます。たとえば、Oracle Fail Safe を使用すると、システムの高可用性を継続して維持できますが、システムの設定サイトに被害をおよぼす障害を防ぐことはできません。同様に、Oracle Data Guard は障害時に優れた回復機能を提供しますが、プライマリ・サイトから物理的に離れたサイトに運用を切り替えるためにかかる時間は、数分の場合もあれば数時間におよぶこともあります。Oracle Fail Safe と Oracle Data Guard を組み合わせることで、データベースの可用性と障害耐久力が高くなります。

